講話

幼兒の心理的發達（八）

東京家政大學教授　山下俊郎

五、五歲兒の心理的發達（つゞき）

（3）情緒的發達

情緒の發達はおよそ五歲までのあいだに、一通りの基礎が出來上るといわれている。わたくしたち大人の毎日の生活に見られるようないろ〳〵の情緒は大體五歲までのあいだにひと通りは幼兒の心に現われて來るようになるのである。ブリッヂエスは、幼兒の情緒の發達について、二歲ごろまでのあいだに恐れ、怒り、不滿、興奮、愛情、喜び、快というような情緒が現われて來ると云つて居り、この後五歲までの間にこの七種類の情緒がさらに分かれて、恐れからは恥しがり、恐れ、心配というような枝が出て來るし、怒りからはしつと怒り、うらやみ、失望というような情緒が分かれ、不滿からは不滿足、嫌忌、愛情からは一般的な愛情の外に子供としての甘つたれる心持ち、つまり受け身の愛情と、小さい者を可愛がる愛情とが分れて出る。また喜びの中には一般的な喜びの外にさきになつて現われて來ると期待されることに對する『のぞみ』と、大得意有頂點といわれるような情緒が分かれて來るといつている。したがつて、五歲の幼兒に見られる情緒にはこの外に一般的な興奮と快とを加えて、合計十七種類の情緒が數えられることになるのである。そしてこのような情緒をながめて見ると、わたくし達大人の毎日の生活に現われて來る情緒のほとんど大部分をつくしているといつていいことが認められる。したがつて、いわゆる情緒というものは、五歲までの幼兒期のあいだに一通りの基礎が出來上るといつていいのである。

このように情緒が五歲までの幼兒期のあいだに一通りの基礎的發達をとげるということは、幼兒の性格の發達に對して非常に大切な意味を持つている。一體わたくし達の性格というものは、心のはたらきの中で知的方面以外の情緒的、社會

的方面の心の動きによつて形作られるものである。したがつて情緒というものは少なくとも人間の性格の半分の要素を形作つている。一般的に言つてこのようなことが言えるのであるが幼兒の心においては大人以上に情緒が大きな意味を持つている。したがつて情緒の發達のようすによつて性格が定まつてくることになるのである。このことを考えると情緒の基礎的發達が幼兒のあいだに一通り出來上るということは性格の發達に對して非常に大切な意味を持つていることになるのである。

次にひとつ〳〵の情緒のうち、おもなものについて、五歳兒に見られる發達的特質を觀察して見よう。

泣くことについて見ると、四歳兒は三歳のころに比べて大分泣かなくなつてはいたのであるが、五歳兒は泣くことがすでにもう非常に少なくなつているのがふつうである。もちろん多少は泣く。怒つたとき、つかれたとき、ひどく恐いときというようなときに泣くことは泣くのであるが、もうほんのちよつとの時間しか泣かないし、自分を抑えることが出來るようになつて居り、涙を出しながらも我慢しておさえるということも出來るようになつている。

怒ること、ことにかんしやくを起してドタバタあばれたりするというようなことはもうほとんどなくなつている。このようなことについてはすでに一應の落ちつきに達しているのが五歳兒の狀態であるといえよう。

恐れにおいても五歳兒は大分恐がることが少なくなつている。ことに動物や見なれない人をこわがるというようなことは非常に少なくなつている。しかし、けがをすることやところぶことや犬などをこわがることは見られるし、くらやみに對する恐れはまだ消えてはいない。しかし、全體として見ると四歳ごろまでに見られたような幼兒らしい恐れは大部分姿を消していることが觀察される。

このように情緒の發達の大體のようすを見ると、五歳兒はすでにはじめにも述べたように、一應の發達のまとまりにまで達していると考えられる。この面からも頼りになる、獨立的な段階にまで達した幼兒の姿が見られるわけである。

(4) 社會的發達

社會的發達においても五歳兒は四歳兒にくらべて一段とすすんで來ている。

五歳兒は非常にしつかりした、たのもしい感じを與えるようになつている。幼兒園や保育所においても、年長組の子供というともうひとかどのお兄さんであり、お姉さんである。五歳兒は獨立心にとみ、自信を持つているので、たのもしく何かことを頼んでもまかされるという感じがする。このことについては、すでに四歳兒のところで述べた基本的習慣の自立の完成ということが非常に深い關係を持つている。すなわち、幼兒はおよそ四歳までのあいだに一通り自分の身のまわりの始末が出來るようになつている。これは五歳になるとさらに完成される、このように幼兒が自立を完成するというこ

とは、幼兒が自分の生活を自分のものにするということは自分の世界を持つことである。自分自身の世界を持つということは、何よりも大きな自信を幼兒に持たせることになる。ことに五歲兒に見られるたのもしさのよつて起る理由があるのである。このことを考えると、いままでの各年齡の所でたび〳〵述べて來た基本的習慣の自立ということが非常に大きな意味を持つていたことがこゝにかえりみて考えられなければならないはずである。自立の完成ということは幼兒の性格教育における最も大切な項目の一つであることがここに再認識されなければならないのである。

五歲兒はこのように獨立性を持つているとともに、ものごとをまかせられ、また大人の賴むことや命ずることをうけ入れ、從順になる傾向をはつきりと現わして來る。この傾向はすでに四歲兒のころに見られたことなのであるが、五歲兒になるとそのことが一そうはつきりとして來る。このことは例えば、幼兒のメンタルテストにはつきりと現われて來る。幼兒のテストに、赤いカードと黃色いカードをゴチヤ〳〵にまぜて與え、赤いカードを赤い箱に、黃色いカードを黃色い箱に入れるという仕事をさせるテストがある。このような作業をさせると三歲ごろまでの子供は途中で自分の好きなように勝手なことをはじめてしまつて中々きちんとやれない。四歲になるとどうやらやれるようになる。そして五歲になると始めから終りまで、言われたとおりのしごとを忠實にきちんとやるという態度が出て來るのである。このことを心理學的な用語で言うと課題認識——つまり言われたことをその通りにやるという意識——が出來たというのである。五歲兒が從順で、ものごとをまかせられるようになつたというのはこういうことであるが、このように發達して來たことに對してはいままでの生活の中でたび〳〵經驗したことがようやく生きる段階にとどいて來たのである。

五歲兒の心は社會的な發達から言つて、ひろく自分のまわりの世界、ことに社會的な世界に對してひらけて來たと言つていいであろう。幼兒たちの遊びにおいてごつこ遊びが非常に盛になつて來るという傾向は、すでに四歲兒のうちに現われていることを見たのであるが、この傾向は五歲兒になつてもまだつづけられているといつていい。ただそこに見られる違いは、四歲のころにくらべて、もつと活潑に自分の周圍の社會生活のいろいろの形がとり入れられて來たことである。そしてその結果として社會におけるいろ〳〵の生活の實態がとり入れられるので、協同的組織的になる傾向が非常に強くなることが見られる。例えば、汽車ごつこをとつて考えて見ると、四歲兒までは繩の輪の中に數人が入つてただ走りまわるということだけで滿足しているが、五歲兒になると機關手と車掌が出來、驛が出來、驛長が出來、出札が出來、改札が出來、ふみ切り番が出來るという風にいろ〳〵の役割が出來るとともに、それ〴〵の役割をはたすために切符やはさみや旗や笛というようなものが要求され、あるいはもらつて來たり、あるいは作つたりするというように、遊び全體をすすめ

て行くために、めい〳〵の役割や仕事が組織と分化の度を加えて來るようになることが觀察される。ここにさきに述べた知的發達や運動的發達に裏づけられてひらけて來る社會的發達のすがたが見られるのである。

幼兒たちお互いの社會生活においても幼兒たちは五歳兒になると、お友達と遊ぶことを心から好むようになつて來る。お互いに仲よくして、協同的に遊ぶことが可なりよく出來るようになつて來るのである。幼兒たちが自然のままに遊んでいる狀態を觀察して見ると、獨り遊びや、傍觀狀態や、並行的遊び、というような狀態は、五歳ごろになると非常に少なくなつて來る。まず七〇%ぐらいは誰か知らお友達と一緒に遊んでいる。おともだち遊びの世界がいよ〳〵自分のものになつて來たのである。しかし、幼兒たちがお互いに仲間になつて遊ぶグループはまだそう大きいグループではない。そこにはやはり幼兒としての限界があるわけである。全體的に見わたして見ると、幼兒の作るグループはせい〳〵二人から五人ぐらいのグループである。これ以上の大きいグループは、たとい出來ることがあつても極めてまれである。大人が中に入つてまとめ役をするか、非常にすぐれたリーダーが幼兒の中から現われるかのどちらかの場合でないと、これ以上の大きいグループが出來ることはまずまずないと言つていいであらう。

このようなグループの中での幼兒たちのお互いの生活はどうであらうか。まず順調な發達をつづけて來ている幼兒であつたならば、相當の程度に自己主張をすることが出來る。がんばるべきときには充分にがんばるのである。このがんばるという傾向は幼兒の心が自己中心的な傾向を強く持つていることから考えると、當り前のこととして認められるであろうが、もう一方から言うと、幼兒たちには、必要なときには他の幼兒に信頼し、まかせるという傾向も強く出て來ている。ここにこのような裏づけを持つた自己主張は、幼兒たちがお互いに協同して、仲よくして行くという生活の形がひらけて來ていることを示すものであるということが出來るであろう。このようにして五歳兒の社會的發達は子供同志の社會生活においても、一段とすすむ方向をとりつつあることがここに示されているのである。

このように、五歳兒が社會的發達において非常にすすんで來たことは、社會生活の中における自分というものが、その社會生活の中にちゃんとした位置をしめて來たことを示すものである。この社會生活の中における自我の確立は、さらに自分の眼を自分のまわりの小さい者へ向けるという餘裕を生み出して來ると見られる。その結果、五歳兒は自分よりも年齢的に小さい者をいたわり、可愛がるという傾向を現わして來るようになつて來るのである。

五歳兒はこのようにして社會的發達において一段と進んで來たことをわたくし達は見ることが出來るのである。

（二五頁へ）

「併し何と澤山の（多くの頁）紙になつたことでせう」と叔父が言つた。「これはどうにか手紙になるね」と彼は冗談を附け加えた。

「ああそうです」とリナは懇願するように母の方に向いた。

「若し私が――お母さん、あなたやお父さんのようにこんなに小さくそしてこんな文字で書くことが出來さえすればどんなにかいいでしょう。あなたの書いてらつしやる時はたいへん早くそして私のようにこんな澤山の紙を使わなくても濟むんですもの。お願い、お母さんそれを屹度教えて頂戴！　お願いです！」

「はいはい、リナ、出來ますよ。ただそのためには、私達はお父さんの留守中の今の暇の時間よりも、もつと多くの時間を用いなければならないのよ。リナはそれを小學校でもつとよく學ぶでしよう。私達が待ち望んでるお父さんが間もなく歸つてらつしやるでしようから、その時リナはその學校にはいれるでしよう。それまでリナはこのようにしてただ安心して待つてなければなりません。それまでは愛するご本の讀み方で、時間を面白く過ごすことが出來るでしよう」

「ああそうです。そしてそれからお母さんのように書きましようね」

（七頁より）

形だけの整備をはかり、教育内容という言葉をカリキュラムと呼びかえることによつて、改造が出來上つたと考えるならば、大きな誤謬の原因となるであろう。教育上のどんな進歩でも、それが可能になるためには、多くの努力を必要とする、教育の改造に關して、手輕に他の形を模倣することは嚴につゝしまなければならない。

（三四頁より）

（5）五歳兒の發達的特質

五歳兒は幼兒期の終りに近い所にいる。たのもしい、たよりになる、獨立的な能力と性格とが幼兒の心のうちに育つている。この成長を順調につづけさせて行くように考えることが、わたくし達大人のつとめである。

新刊紹介

厚生省兒童局保育課　副島ハマ　氏著

（幼兒の集團遊び歌曲集）

こどもの樂しい歌遊び

『地方の講習會で、若い熱心な保母さん方に「……ぜひ集團遊びの樂譜を……」と云われ、自分が保育に踏み出した頃の苦勞を想い合せて、すすめられるままに、古くから幼稚園、保育所で用いられているものを二十曲だけまとめて見ました。保育界の捨石になりたい私の若い保母さん方へ贈る小さな贈物の一つです』

これは同著のはしがきの一節であるが、保育きちがいと仇名される副島氏の、保母を愛する眞心は、この書出でて、增々多くの保母を喜ばせることだろう。　定價一〇〇圓

（目黒區下目黒二ノ四六八・白眉社發行）